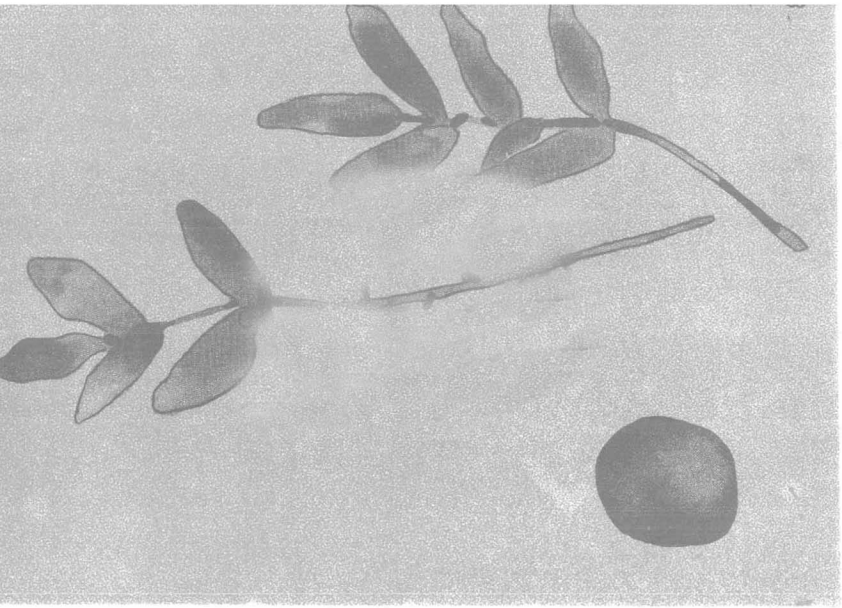
奇妙な仲

芝木好子



東方社版

奇妙な仲

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和四十一年一月十日発行

定価三九〇円

著作者　芝木好子

発行者　石渡磨須子

整版者　内田柳次郎

発行所　東方社

東京都文京区高田豊川町六〇

振替東京五七七七四番

電話（九四三）四四五一―四番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1966 Tohosya Printed in Japan

奇妙な仲

芝木好子

目次

奇妙な仲　5
鎌倉まで　33
老妓の涙　51
舞扇　81

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

良人待ち　109
花霞　133
芸術家の扇　163
落葉　197
美しい記憶　237

装幀　赤坂三好

奇妙な仲

1

陽の当る朝の縁側へ出て、良人のツイードの上着にブラシをあてていた津也子は、内ポケットに固い物があるのに気付いて手を入れた。小さな四角い容器で、きれいな包装紙に包まれ、銀のリボンで結ばれている。一目で指輪のケースと分つた。手にとつて眺めたが、良人の立川が来る気配なので、何気なくポケットに落した。

立川は清潔なワイシャツに手を通しながら、縁先へきて春の気配のする庭へ目をやつた。沈丁花が匂つている。多忙な立川は日曜日というとゴルフに行くので、朝の一ときしか庭を眺める時間もなかつた。

「今日は出かける日だろう」

と彼は妻の色白い顔から、華奢な肩へ目をあてた。

「感心に覚えていらつしやるのね」

「あたり前さ」

一週に三日、津也子は講習会へ行つていた。ある婦人団体主催の婦人講座で、三カ月続いて一サークル終るものであつた。お題目はかなり高級で、毎回午前と午後に分れて著名な大学教授などが専門の講義をした。集るのはたいてい中年の家庭婦人で、みんなノートを抱えてくる。

「よく続くじやないか、おもしろいのか」

「まあまあね」

「紺野君は人気があるだろう」

「相変らずよ、あの人」

津也子はいつになく愛想のよい良人を感じながら、ネクタイを結んだ背中へ背広を着せかけた。立川の肩幅は広くて、逞ましかった。会社の渉外部の部長という多忙なポストについていて、やつてゆける肉体と気力を持つていた。彼は会社から迎えにくる車を待つて、あわただしく出かけていつた。

一週に三日の外出がこの頃の津也子には、なによりの愉しみになつていた。良人は留守勝ちだし、一人息子は高校に入つてからフルートを吹くのに熱を入れて、毎日おそくまでバンドの練習で帰らなかつた。初め、この講習に紺野が誘つてきた時、

「有閑婦人の集りね」

と津也子は気が進まなかつた。

「家にいるよりはましじやないか」

「そこで紺野先生の無駄話を聴くわけね」
「人生の諸わけを教えてあげるからさ」
「たいへんな講師もあつたものね」
家にいるよりましだという言葉に惹かれて、津也子は講座に出てみた。世間には時間の余つた婦人が多いとみえて、三十代の似たような環境と思われる女性がおどろくほど集つた。紺野はその講座の一つを受け持つている歴史学者だが、自分で「女性史専門」などと言つて、くだけた話をするのが得意だつた。初めての講義の日から、彼の顔は婦人たちに親しいものであつた。時折テレビに出るせいで、昨今はテレビほど普及率の高いものはなかつた。それに講師の中では最も若くて、婦人たちと飛び離れた年齢ではなかつた。
「今回の講義で、歴史上の悪妻伝でもやりますか。さもなければ烈婦伝」
すると聴講生から手が挙つて、
「先生、悪妻の方をお願いします」
「いいでしょう、その方が実感がおありでしょう」
薹の立つた女子聴講生はケラケラ笑つた。時間とゆとりがあつて、なにか身につけたい女性たちは、お茶やお花の稽古事はとうに卒業していた。といつて評論家の観念的な幸福論を聴いても、空虚な気がしてたのしくない。歴史だの経済だの法律だの、一見かかわりのない学問に触れることが、新しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

興味となつていた。こういう自由な場所で、悪妻伝を聴くのは悪くなかつた。

「大体女性は結婚して四五年経つたら、悪妻の素質を現すものです。あなた方だつて内心は、もう一度位恋愛がしたいと思つているでしょう。独身の四十歳そこそこの僕の顔を熱心に見ている時、なにを感じるか、よく考えてごらんなさい」

紺野の話はこんな調子で、なにを言い出すかわからない。

「家庭を破壊しないですめば、女性も恋愛をしたいわけです。本質的には男と少しも変らない。ところが社会道徳が抑圧するからヒステリックな現れで、悪妻が作り出されるというわけです。みんな自由に恋愛させてごらんなさい、悪妻は出ないでしょう」

まだ髪の濃い、髭の剃りあとも濃い感じの、男の匂いにあふれた明るい紺野の弁舌にあうと、品の良い、たしなみを身につけた婦人たちは、うれしそうに小さな笑いを絶え間なく洩した。紺野の悪妻伝は上代からはじまつて、天照大神から歴史の歩みとともに移つてゆく仕組だつた。津也子はどの講座より彼の時間が聴講生であふれているのをみて、女は同じことを考えたり、求めたりしているのだと滑稽に思つた。時間によつては十数名の生徒しかいない講座もあつたが、紺野の時間は教室が埋まつて、活気があつた。

その日、良人を送り出してから、津也子はいつもより重たい気持だつたが、紺野の講義の日なので、身仕度をした。五年前に心臓の発作を起してから、急いで走つたり、苦しい心配ごとをしないよ

うに、気をつけていたし、家事も手伝いをおいて楽にしていた。彼女は元々華奢な体質だったが、子供を生んだ若い頃は少しも弱くなかった。五年前に立川に恋愛沙汰が起きて、一カ月あまり帰らないことがあった。相手はバーに勤める女性であった。津也子は誰にも言わずに待っていた。紺野にはこと知られたくなかったから、母にも打明けられなかった。紺野の母と彼女の母は姉妹であった。姉妹が親しいように、従兄妹同志の紺野と津也子も昔から仲がよかった。

立川は時期がくると家庭に帰ってきた。その前後に津也子は心臓の発作に見舞われて、死にかけた。一人で堪えていた不安や苦しみが、そんなかたちで爆発したのかもしれなかった。周囲にそのことがわかった時は、事件は納まっていた。紺野はあきれたように、

「バカだなあ、女の家へ乗りこんで、襟がみを掴んで派手に喧嘩をすりやあいいのに。そうすれば気分が発散するのさ」

「私、力がないもの」

「津也子じゃ駄目か」

彼は見くびったように、細い彼女の腕を掴んでみた。

「そんな時、僕が憂さ晴しの相手をしてやったのに」

「結構よ、どうせ嗤われるのがおちですもの」

津也子は彼に、悲しい時つきあってほしくなかった。不幸な姿も見せたくなかった。今もその気持

に変りはない。世間の細君たちが、なにかしら充たされたいために出かけてゆく講座へ、彼女もやはり出かけていった。

紺野は午後の講義に、少しおくれて教室へ入つてきた。身なりは悪くはないが、行儀がよいとは言えない無造作な姿で教壇に立つと、親しみ深い雰囲気が彼をたちまち取りまいた。もうこの講習会も三分の二は過ぎていたから、彼等の間には心おきない交流があつた。

「遅刻をして失礼」

と彼は上背のある軀を折つて、腕時計を覗いた。

「超特急というのは、早いですねえ。僕は昨日神戸へ講演に行つて、昨夜は名古屋に泊つたんです。なぜ名古屋に泊つたかというと、その方が居心地が好いからです。今朝名古屋で目を覚まして、風呂に入つたのに、午後にはもう東京で予定の如く講義に出ている。人間も使いでがあるようになりましたね」

彼は話しながら、なんとなく教室中へ目を配つた。津也子の顔にゆきつくと、三秒ほど目を止めて、またゆつくり視線を移した。名古屋に一泊したという報告が、それだけで婦人たちに笑いを誘つた。悪妻伝の合間に、結婚する男の気がしれない、と喋る紺野の気儘な生活を、彼女たちは嗅ぎつけていたからだつた。ほとんど一人残らず結婚している婦人たちは、名だたる悪妻の歴史におよぼす影響などを聞くのがたのしかつた。悪妻の憎らしいような自由に、半分あこがれて、半分は批判していた。

その日の講義は足利時代の「日野富子」であつた。八代将軍足利義政の北の方日野富子は、義政の政治にあき足らず、ずいぶん積極的に生きた女性だと紺野は語つた。応仁の乱の時代で、農民一揆が起きたり、下剋上が行われたりした暗い乱れた世の中に、日野富子は中心になつていた。どこから調べても善政をほどこしたとは言えない。その上、時の天皇となにやらあつたのではないかとも言われているのを、紺野は忘れずに話した。それでいて、憎たらしいはずの日野富子が、若い我が子を守ろうと懸命になつている母親らしさも感じられるのだつた。津也子は聴きながら、紺野が農民一揆の著書を書いていることを思い出した。しかしこの教室の婦人たちは誰一人想像も出来なかろうと思つた。

時間の終りの二十分ほどは、生徒の質問というかたちで、雑談になつた。

「先生、日野富子は義政のお坊ちゃん育ちの気性に、頼りきれない、気の毒な女性ではありませんか」

一人が質問をはじめた。富子が初めから政治に関心を持つたかどうかは疑問で、むしろ自分の立場を守つて生きるために、そうなつたのでしようと中年の婦人はきびきび喋つた。歴史上の人物と、我が身の立場とを思い合せているように聴えた。そんな質問のあとには、日野富子を取りまく権力や生き方が話題になつた。紺野は腕時計をのぞいた。

「先生、今日は十五分遅刻なさいました」

甲高い声がすると、みんな笑つた。
「いや、僕はいいけど、早く帰つてテレビを見たい人もあるかと思つて」
紺野は張りのある眼で、教室を見廻した。
「先生、有志がお茶をお誘いすれば、いらつしやいますか」
「勿論、応じる用意はあります」
彼は明るい表情で、ノートを閉じた。
「ただし、予約して下さい。これでも約束の多い毎日ですから」
聴講生が笑つている間に、紺野は教室をさつさと出ていつた。うまく身を躱して泳ぐ魚のように敏捷に見えた。

2

津也子は帰つてゆく婦人たちと反対の方向へ出て、国電に面した市谷の土手の近くの繁みの中をゆつくり歩いた。学生だけが知つている散歩道で、余計な人間はいなかつた。少しすると、短か目の外套を着た長身の紺野が足早に寄つてきた。黄色地に黒い線の入つた和服の軽いコートを着た津也子を、彼は上から下まで眺めた。
「なに見てるの」

「まだそんなに老けないな」
「大きな息子がいるわ」
「早く結婚するからさ」
「あなたのように、いつまでも落着かない人も困るわよ」
「一向不便を感じないのでね」
並んで歩くと、津也子は前後を見まわした。
「教室の人に会うといやだわ。誤解を招くおそれがあるわ」
「あの二人は怪しい、もうどこまでいってるか」
「普段がふだんだから、迷惑する」
津也子は目をあげて、親しい者の顔を眺めた。
「しかし津也ちゃんがいると張合がある」
「どうして」
「みんなと一緒によく笑ってる」
「あなた、大学でも、よその講演でも、あんな冗談を平気で言うの」
「学生にいってやる、女を警戒しろ、絶対に結婚するな」
津也子は苦笑した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.